

ふるさとの昔話

岩本万野の天狗岩



▲天狗岩

岩本の実相寺西側の道を登って行くと、家が5・6軒ある万野部落に着きます。万野部落の西側は絶壁で、その中腹に富士川へ突き出た大きな岩があります。里の人々は、その岩が天狗の顔のようなので「天狗岩」と呼び、天狗のすみかに違いないと思っていました。

天狗に乗った漁師

ある日の夕方のことでした。一人の漁師が富士川で鮎をとつていると、漁師のなりをした天狗が現れて、「俺と相撲をとらないか」と言いました。漁師が無視していると、天狗は「漁は後で俺が手伝うから相撲をとろう」といいます。漁師は、断わると怒るかもしれないと思い、河原で相撲をとりました。漁師に負けた天狗は、顔を真っ赤にして「もう一度」と飛びかかってきました。漁師は負けてやらないと幾度もかかってくるに違いないと思い、威勢よく投げつけられました。

喜んだ天狗は漁師の手伝いをしましたが、さっぱり漁がありません。天狗は漁師をおぶい、目を閉じるよ

う命じると、風を切って空を飛び、どこかの河原に着きました。天狗は、たちまち鮎をいっぱいとり、再び漁師を背中に乗せると元のところへ帰ってきました。漁師が、鮎をとつた川を尋ねると、「伊勢の鳥羽の川さ」と言ったそうです。

子供のころ聞いたね

万野の長老鈴木茂雄さん(74歳)と奥さんの富美代さん(67歳)は、「天狗岩の天狗は鼻を引つばって人を驚かすと聞いている。漁師の話は子供のころ聞いたよ」と話してくれました。



▲鈴木さん夫婦

地名の由来

富士岡



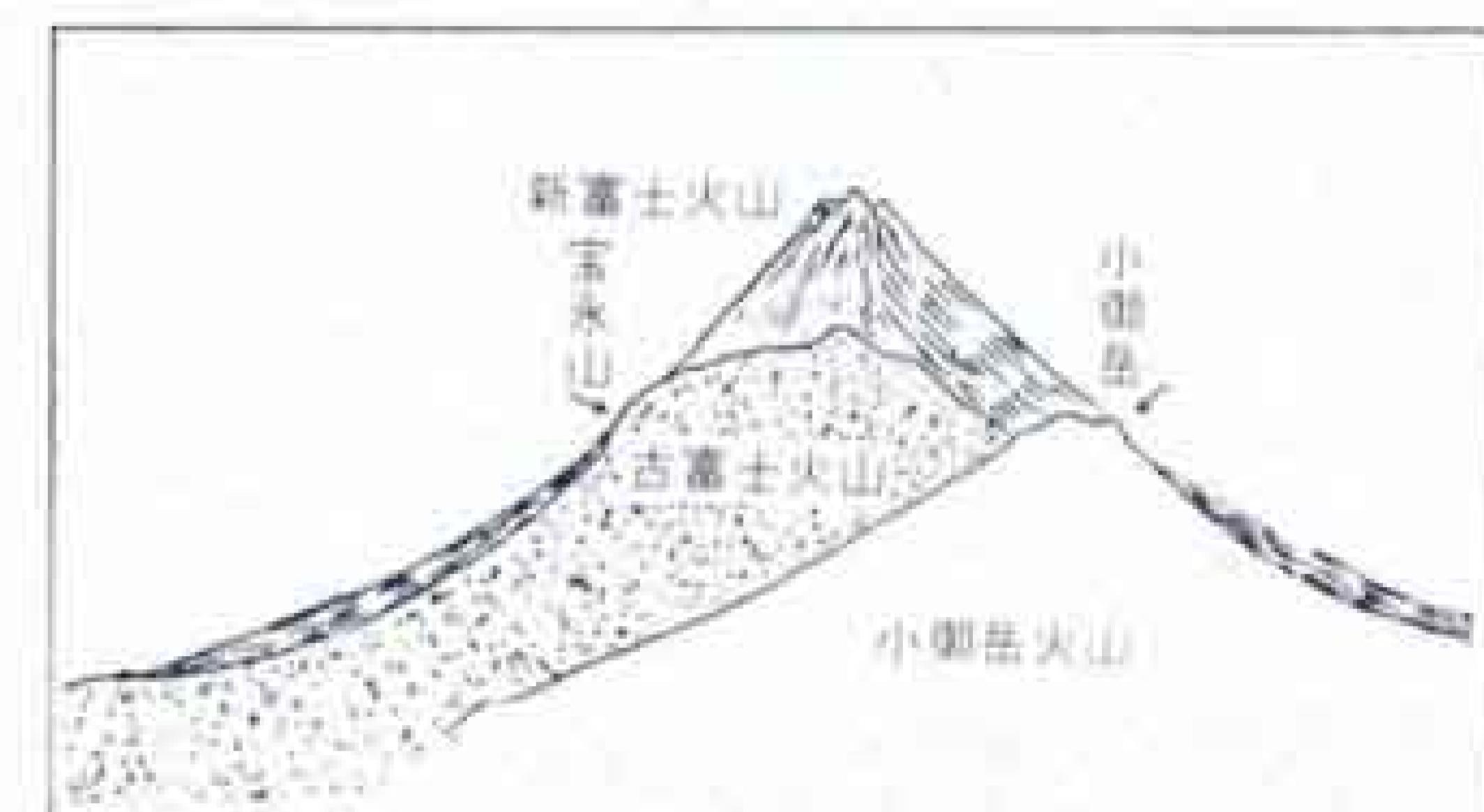
旧吉永村の東端、赤瀬川に沿った地域を富士岡と呼んでいます。これは明治5年に宗高村を富士岡村と改名したものである。

宗高とは、この地が舌状台地であることから、胸高を宗高としたものであろうか。一説に、慶長のころ大井川の下流から移住してきた人々が開拓し、故郷の村名をとって宗高村としたともいわれる。

富士のあゆみ

1

私たちの郷土富士市は、昭和41年に2市1町が合併して以来来年で20年を迎えます。そこで、今回からシリーズで郷土の歴史を振り返り、あゆみをたどってみたいと思います。第1回目は「富士山の成り立ち」です。



3階建ての富士山

富士山の誕生は、今から20~30万年ぐらい前にさかのぼります。そのころ、富士火山帯の活動が始まり、噴火で高さ2,500㍍の小御岳火山ができました。そして、2万5,000年ぐらい前になると、小御岳火山が噴火を重ね、その上に高さ2,800㍍の古富士火山ができました。

現在の3,776㍍の美しい新富士山ができたのは、1万5,000年ぐらい前で、古富士火山の噴火によるものです。ですから富士山は3階建てということになります。最後の噴火は、1707年(江戸時代)で、以後静かな眠りを続けています。

こちら編集室

「富士市の文化は発展途上」とは7面で紹介した佐野穰一さんの話。無芸大食の自分と比べて、佐野さんの文化水準に感嘆することしきり。「あなたも見ならえば」と軽べつの視線で女房の声。「……」